

ブレナン, マイケル 准教授

英語

オーストラリアの言語や文化、そこに住む人のアイデンティティ。一見して日本と関係のないテーマに、日本を見つけ、いつしか夢中になっていく。

ブレナン、マイケル先生のゼミで扱われるテーマは、オーストラリアだ。しかも、具体的な対象はアイデンティティ（自分の独自性を認めたいうえで、それが自分であると確信すること）という、個人の領域にまで踏み込む。南半球にあるオーストラリアと、北半球にある日本。一見すると全く関係のない2つの国の間に、研究を進めるうちに共通点が見つかっていくプロセスは、まさに学びの醍醐味であろう。ブレナン先生は、そんな学生たちの成長をやさしく見つめながら、的確なアドバイスを届けていく。そして、研究成果を英語でまとめあげるというゴールは、生涯にわたる自信をもたらしてくれるのだ。

オーストラリアの問題を日本の視点から考える

個人のアイデンティティや社会における行動が形作られていくうえで、言語や文化がどのように重要な影響を与えているのか。あるいは、個人はどのように社会に受け入れられていくのか。こうした個人と社会相互の関係を、母国であるオーストラリアを通して見つめる。それが、ブレナン先生のゼミのテーマだ。「植民地としての歴史や先住民の問題、あるいは政治的なディベートでよく使われる『オーストラリア的な

価値観』という言葉や、『多文化主義（国家や社会のなかに複数の異なる人種・民族・集団の文化の共存を認めること）』など、さまざまな問題について学びます」

この言葉からも分かる通り、オーストラリアの歴史や文化についての学習は必須となる。オーストラリアという国は、観光地としては日本人にも親近感があるが、学ぶ対象だけを聞くと、自分とは遠い国のこと、と思われるかもしれない。しかし、実際に学んでいく過程では、これらオーストラリアの問題を「日本」という視点からとらえていく方法をブ

レナン先生は勧めている。

「学生にとつてなじみやよくなるように、それぞれの問題を日本社会にあてはめて考えるよう指導しています。そうした方法で学んでいくことで、現代のオーストラリアと日本の両方の国の本質を見抜く力が磨かれていくのです。また、しばしばオーストラリアにおいて重要な問題は、日本でも同じように重要度が高いことが分かっています。

例えば過去と現在の先住民に対する処遇についても、オーストラリアには『アボリジニ』、日本にも『アイヌ』の問題があります。また、第

二次世界大戦の経験を共有しているという意味でも両国は同じ立場にあります。戦時中は敵国として戦いましたが、この戦争という歴史は両国に大きな影響を与え、その影響は現在まで続いているのです。

あるいは、移民問題も同様です。「外国人」を受け入れるという対応は、受け入れる国にとってどのような作用しているのか、していないのか、というテーマに対しては、両国ともしっかりと向き合う必要に迫られています。

取り上げる対象は、ジェンダーやセクシュアリティという自分に直結



BRENNAN, Michael (ぶれなん まいける)

オーストラリアのシドニー生まれ。2002年にシドニー大学にて英文学博士号を取得。2年間の日本滞在を経て、2009年4月より中央大学総合政策学部准教授。世界20カ国の編集者が参加する「Poetry International」プロジェクトで現代オーストラリアの詩人38名にインタビューするなど、国際舞台での活躍も盛んだ。

「する問題にも関わってきます」
お話を聞きながら、ブレナン先生が挙げた「オーストラリア的な価値観」という言葉にしても、日本のテレビの討論番組で同じように「日本人としての価値観」などと言いつつ

ていることに気づく。そのように考えていくと、オーストラリアという国の問題は、そのまま日本の問題に、そして自分自身の価値観に直結してくるのだ。

英語による卒論を達成したときの喜び

オーストラリアを対象とするブレナン先生のゼミにおいて、英語力は当然欠かすことができない。調査を含めた情報収集はもちろんだが、卒論も英語で書くことになるからだ。もちろんそれは高い壁なのだが、むしろ、英語による論文作成ができる、という貴重な経験が得られるチャンスが待っていると考える方が正しい。そしてそれは、外国の大学と比べても遜色のないレベルで実現できるのである。

「私のゼミに参加するためには基礎的な英語力が必要です。そして自ら



専門はオーストラリアの現代詩の研究。

の英語の能力向上に向かって積極的
に努力する姿勢が大切だ。

ただ、一方で英語力が全てを決定づけるわけではありません。ゼミを始めた当初はTOEFLで500点のスコアを条件にしていたのですが、結局はこの条件を外すことになりました。よくあることですが、英語力の下のレベルから来た学生がゼミのなかで積極的に発言し、英語で調査を進めていくことに強い情熱をもっている場合も多いからです」

もちろんブレナン先生は、さまざまな角度からゼミの学生たちの成長を見守り、フォローすることも忘れない。それは、ほとんど全員が未知の学びの領域に踏み込むことになる



大学の先生、編集者、詩人と幅広い領域で活躍。



個人のアイデンティティを共通項に、それぞれの問題意識に挑む。

からだ。
「英語によるアカデミック・ライティング（主に学問分野で一定のテーマと構成に基づいて自分の主張を書くこと）の技術と調査能力を高めるチャンスを与えることがゼミの重要な目的の一つと考えています。何人かの学生は初めて英語で自らの考えについて書くことになり、英語で書いた経験がある場合で

の卒論を英語で仕上げるという。実はこれは英語を母語とするか、英語圏の大学の学部レベルでも立派に「挑戦」に値する水準なのだそう。だからこそブレナン先生は、挑戦を成功に導くための支援を忘れない。「英語では書けない」と最初からあきらめてしまわないよう『英語はそれほど大変な存在ではない』と気づいてもらえるように、勇気づける

もわずか2、3ページ程度です。また、このゼミの水準までテーマを深く掘り下げることも、英語によるインタビュや調査をやり遂げたこともない学生がスタートラインに立つのです」
そんな先輩たちも、彼ら自身で大量の調査を行い、ゼミが終わるころには5千〜1万語

の役割です」と語る。「これだけの量の卒論を完成させることは、学生にとっては格闘とも言えるほど大変な労力を要します。したがって私は常に彼らに話しかけ、勇気づけ、方向性で迷うことがないように気を配ります。例えば卒論のテーマについて真剣な議論を通してアドバイスし、論点が合っていない場合は、効率的な調査の方法や別のアプローチを示唆することもあります。読むべき書籍やデータベースの使い方など情報収集の細かな助言も行いますし、学術的な記事収集をサポートしたり私がオーストラリアに帰国した際に、現地の資料を持ち帰ったりすることもあります」
それぞれのテーマに挑戦する学生と真剣に向き合い、支えていくブレナン先生。そのゼミの雰囲気はどこまでも熱い。

シラバスもありません。それでも、小さいながらにダイナミックで刺激的な「学習グループ」をつくることのできたと自負しています」
ゼミにおけるハードルが高い分、それを飛び越えたときの達成感は何ものにも代え難く、皆一様に満足感と自信に満ちた表情を浮かべるといいます。
個性豊かに並ぶ卒論のテーマ
オーストラリアを研究の対象とするブレナン先生のゼミだが、実はそれは絶対条件ではない。「何人かの学生は調査対象をオーストラリアではなく日本のアイデンティティや言葉、文化に定めることでより興味深いテーマを見つけることができるようです。また、複数の国の事例を対象にテーマ設定する学生もいます。いずれの場合も彼らの興味が広がるままに任せています。そのような進め方のなかで、これまでに提出された卒論は、どれもオリジ



留学生や海外で育った経験のある学生、日本で育った学生と幅広いゼミ生が集う。



英語が飛び交う研究室は、とてもにぎやかで笑いも絶えない。

ナリテイのあるユニークな論文になったと評価しています。

日本を取り上げた例では、就活や若者のアイデンティティの変容、方言の戦略的活用など多様なテーマが並びました。また、アメリカで生まれ、社会や世相を反映する表現手段であった「克蘭ピング」というダンスが、どのように日本に広がり変容し意味を変えていったかを論じた学生もいました。

「謝罪と和解」というタイ

高校生の皆さんへ

ブレナン先生からのメッセージは、そのゼミの姿勢の通り、皆さんの背中を後押しするような言葉が並んだ。

「私が皆さんに望むのは、自分の周りの世界にいつも疑問をもち、知恵を活かして恐れることなく手ごわいテーマに立ち向かってほしいということ。そのときに、何かに集中する情熱に素直に従って学んでほしいのです。そして、よく考え、理解し、相手に納得してもらえような双方向のコミュニケーションを大切に提案できる力を養ってほしいと思います。」

最初は、何かを自分で選んで情報収集し、まとめあげていくことに慣れない人がいるかもしれません。しかし、私のゼミのスタイルは学生の成長と興味の変化に応じて方法そのものを再構築し柔軟に内容を考えてきました。毎週、毎週、お互いに学び、アイデアを出し合い、考え方を交換しながら進んでいけば、どんな研究も成し遂げられると信じています」

トルで「盗まれた世代（アボリジニに対する『児童隔離政策』）」、太平洋戦争、南アフリカのapartheidヘイトという歴史的事例を比較したアプローチもありました。調査という点では、インドネシアとフィリピンから来日した看護師にインタビューし、日本における移民の労働について考察したケースもありました。もちろん、オーストラリアと日本のアイデンティティの比較という、スタンダードなテーマに焦点を当てて展開した学生も多くいます」

このように、扱われるテーマは多岐にわたるが、研究を進めるにあたってはブレナン先生のゼミならではの特色がある。

「学生たちは常にどのポイントをキーにし、集中的に扱うかを探し続けなければならない。また、必ずどこかのレベルで、アイデンティティがどのように構築され、社会に受け入れられていったかに注目することになります」